

「アート」の ユニバーサルデザイン 学生チーム・アスパラガスの ワークショップ

Writer
中島 靖雄 NAKASHIMA Yasuo
芸術専門学群
構成専攻
ビジュアルデザイン領域 4年

2 芸術支援フロンティア

病院とアスパラガス

「4年前には考えられなかった、新しい病院の風景が認められ始めている。これまでの病院のルールが、アーティストからの働きかけによって見直されたりしているのだ。…(中略)…病院にとっては、何がおこるかわからないような、“病院で？アート？”が、実は欲しくてたまらなかった、“幸い”と認識され始めているのかもしれない。

この文章は、2009年に発行された“Art Writing”の中の「病院の中にノイズをつくる！—大学附属病院リニューアルチーム・アスパラガスの試み」という記事の一部だ。それから更に4年が経過した今なおチーム「アスパラガス」の活動は継続中であり、そしてその活動の幅を更に広げている。

アスパラガスは、「アートの力で病院の空気をおいしくする」ことを目標に、筑波大学附属病院で活動をしている学生チームである。白いつなぎにフェルトで装飾したオリジナルのユニフォームを身にまとい、病院内を動き回りながらアートを運ぶ活動を行っている。

発足してから今年で9年目を迎え、今ではつなぎを着て院内を歩いていると「アスパラガスの方ですよね？」と声をかけられたり、「うちの病棟でもやってみてもらえないかしら」と現場のスタッフから相談を受けたりすることも少なくない。また、昨年完成した附属病院の新病棟「けやき棟」は、こうした活動の成果がもとになって、建設段階からアートやデザインの要素を積極的に取り入れようという動きが生まれた。病院のアートに対する認識は、確実に良いものになってきている。

アスパラガスのワークショップ

アスパラガスは学生によるチームであるためメンバーが毎年入れ替わり、その度に活動の形態や方向性が少しずつ変化する。それでも、継続して活動してきた中で共通して大切にしている事柄がゆっくりと見えてきた。特にアスパラガスの活動の中核といえるのが、アートワークショップによる患者や医療スタッフを対象とした参加型の企画だ。

代表的なものでは、2009年夏に実施した『なつのおちようさん』という企画がある。「いろどりのおすそわけ」をキーワードに、色水で色をつけるちようちよの飾り「おちようさん」を参加者と共につくり、身の回りに飾っていくことで、病院内を彩り豊かにしていくというものだ。このおちようさんは、1枚の布から2匹分の羽根ができるようにつくられており、1匹は自分の好きな所に飾り、もう1匹は身近な誰かに「おすそわけ」できるという工夫がなされている。4年前のワークショップだが、今でもおちようさんが飾られているのを院内で見かけることがある。

他に2010年冬に実施した『ホスピタウンのメリークリスマス』という企画では、病院を一つのまち「ホスピタウン」に見立て、そこに住むみんなでクリスマスの準備をしよう、というコンセプトのもと、12月中旬約1か月にわたり様々なワークショップを行った。クリスマス当日には、ワークショップの成果物である家をモチーフにしたライト「おうちライト」を一斉に点灯し、幻想的な「まち」



『ホスピタウンのメリークリスマス』より「おうちライト」

の景色の中でアスパラガスメンバーと参加者が一緒におしゃべりを楽しんだ。「病院でこんなクリスマスを過ごせるとは思わなかった」、という参加者の言葉も聞くことができた。

アスパラガスのこだわり

このようなワークショップを考える上で、アスパラガスが毎回貫いている「こだわり」がいくつかある。その中から、メンバーが特に大切にしているものを3つ取り上げて紹介する。

まず前提として、難しい手順を極力省くこと。これは病院という場所で行う上では特に重要だ。もし手先を細かく使う作業がどうしても必要な場合などには、その部分だけ事前にアスパラガスの方で用意しておくこともある。また、ハサミを使ったり、手に力を入れたりするのが難しい参加者の方には、メンバーがサポートするようにしている。

次に、感覚的に楽しめること。たとえば色をつける時などに、参加者に筆と絵の具をわたしてしまうと、どうしても「上手く描かなきゃ」という意識が働いて、楽しんで表現ができなくなってしまうことが多い。先に挙げた「おちようさん」の羽根は、ガーゼにスポイトで色水を垂らすという方法を用いており、誰でも感覚的に色つけができるようになっている。また他にも、ブラシに絵の具をつけて金網にこすりつけ、霧吹きのように色を飛ばすスパッタリングや、型紙を用いて色をつけるステンシルなどの技法を取り入れている。

そして、自由度を持たせる部分を必ずつくり、人によって異なる作品ができるようにすること。これはどのワークショップでも絶対に欠かさないようにしている要素だ。みんなが一様の手順を取り、全く同じ完成品をつくるのでは、単なる工作教室で終わってしまう。そうではなく、お互いの作品の良さや感性の違いに気づき合い、そこに新しい関係性が



「おちようさん」着彩の様子

生まれてくるのが、アスパラガスのワークショップにおいて最も重要な部分だといえる。

こうしたこだわりがあるからこそ、アスパラガスのワークショップらしさが生まれ、ここまで病院の中で承認を得て来られたのかも知れない。

「アート」のユニバーサルデザイン

近年では病院だけに限らず、ある特別支援学校の教員の方から「おちようさんの作り方を教えてほしい」という連絡が入ったこともあった。アスパラガスのワークショップのノウハウが、病院の外でも役に立つのだ。考えてみれば、病院の中でどんな人でも楽しめるアートの形態を考えるということは、たとえ体の一部が不自由であったり、気持ちが沈んでいたりしたとしても、同じようにアートを楽しめるような方法を考えるということだ。デザインにおいては、文化や身体的特徴などを越えた「すべての人のためのデザイン」といった意味でユニバーサルデザインという言葉が使われるが、アスパラガスは病院の療養環境を改善しようとする過程で、知らず知らずの内に「アート」のユニバーサルデザインをしていたのではないだろうか。

共に手を動かしながら、たわいのない話をしたり、時には自分の病気のことや人生のことを語ったり、他の参加者の創造性に刺激を受けたりする中で、お互いの立場を越えた人と人とのコ



「おちようさん」をカーテンに飾っている様子

ミュニケーションが生まれてくる。こうしたゆるやかな結びつきによって、院内で生活する人々の関係性の面から「病院の空気をおいしくする」ことが、アスパラガスの一つの大きな目的だ。アートワークショップは、言わばそのための手法の一つに過ぎない。しかしそれは、9年間かけてじっくりとデザインされてきた、アスパラガスならではのアートの手法なのだ。

“病院で、どのようなアートを？”

今、日本では病院において医療と芸術がコラボレーションする「ホスピタルアート」と呼ばれる取り組みが、各地で盛んに行われるようになってきている。従来の「白い」、「薄暗い」、「怖い」といった病院のイメージは少しずつ改善されてきており、最近では光や色彩を取り入れた美しいデザインのものも増えてきた。また、アーティストや地域の学生が関わって、院内の壁や医療機器に絵を描いたり、装飾をしたりといったプロジェクトも行われている。

こうしたホスピタルアートの事例の多くは、病院の設備の面から療養環境を改善することを目的とした取り組みだ。それに対してアスパラガスのワークショップのように、患者やスタッフとの直接的な関わり合いを通して、院内での人々の生活をより良いものにしていこうとするアートの形態を取っているところは、まだそれほど多くない。

“病院で？アート？”という壁をクリアしようとしている今、これからは“病院で、どのようなアートを？”という問いについても考えていく必要があるだろう。アスパラガスがこれからも活動を継続し、手法やその効果を発信していくことで、この問いに対する一つの答えが出せることを望んでいる。



『ホスピタウンのメリークリスマス』で制作したオーナメント

2 芸術支援フロンティア



ユニフォームの白いつなぎを着たアスパラメンバー



『なつのおちようさん』より「おちようさん」